

## もう一度考えてみた「子どもたちが『主人公』になるために」

### はじめに

障害児学童保育所ぱるは、2005 年 9 月にスタートしました。はじめは、10~20 名ほどの子どもたちが利用していましたが、年々利用者数が増え、2014 年の夏休みなどは 40 名を超える日も出てきました。身体障害・知的障害・発達障害の子どもたちが混在する中で、中高生において 1 日の活動の中の一部を別の活動に分けてみたりもしましたが、「放課後」という限られた時間の中で、日々の遊びの設定の難しさ、送迎の複雑化等の課題から第 2 の学童の必要性を感じるようになりました。また、子どもたちもせまい室内に、元気いっぱいの子どもたちもいれば、「ハイハイ」で移動する子ども・マットで横になって過ごす子どももおり、口に出して表現することは難しくても、お互いに窮屈な思いをさせてしまっていたように感じます。2015 年 6 月のあみ開所に合わせ、新「ぱる」として、再スタートを切りました。

### 子どもたちの姿から

ぱるの子どもたちは、ダウン症等の知的障害のある子どもたち、脳性まひ等の肢体不自由の子どもたちが一緒に活動しています。食事や排せつ、着替え、移動と生活全般において多くの時間を必要とし、また手先の不器用さ等もあり苦手意識も強く、そもそも活動への参加意欲も低いように感じられました。そこで、ぱる・あみに分かれる準備段階で、活動の内容を子どもたちの姿に合わせることで、子どもたちが楽しく参加できることを目標とすることを職員で確認しました。

ぱる・あみに分かれてからは、1 日に利用する子どもたちの人数が減ったこともあり、活動前の打ち合わせ(レインボー会議)で、子どもたち 1 人ひとりへの声かけや活動への参加の仕方を話し合うことが多くなりました。ゆっくりペースの子どもたちなので、1 日だけの活動では終わらず、2 日・3 日と数日~数週間かけての活動も多くなり、子どもたち自身で見通しを持ち、「明日は〇〇をしよう」と次の活動への期待をもてる子どもも出てきました。10 月のハロウィンでは、はじめに子どもたちに 1 週間の計画の話をしました。お菓子入れや衣装を作る日、またお休み等で作れなかった子どもたちのための予備日も設け、自分の分ができた子は、まだ完成していない子たちの手伝いをしてほしいことを伝えました。ホワイトボードを使い、子どもたちが具体的に見通しを持ちやすいようにし、終わりの会ではその日したこと、明日することを伝えていきました。また、リハビリ等でお休みの子どもたちには、別の日に作る時間があることを伝えました。当日は、びいさんとういるさんにお菓子をもらいにいきましたが、そこでもグループを 2 つに分け、子どもたちに合わせた受け渡し(すぐにお菓子をもらえるグループといたずらをしてお菓子をもらうグループ)をしました。恥ずかしさもあり、ドキドキしながらお菓子をもらいに行っていましたが、おやつの中にはもらったおやつを嬉しそうに食べる子どもたちの姿がありました。

また、おわりの会の時間に子どもたちがその日 1 日の振り返りを発表する時間があります。発表したくない子は発表したくない気持ちを受け止め、発表したい子どもだけが発表するもので、発表する内容も特に決まっておらず、その子がその日印象に残ったこと等を発表する時間です。分かれたばかりのころは数人しか手が上がらず、周りにつられて手を挙げて指名されるとカチコチに固まってしまい、何をどう伝えたらいいのかわからない A ちゃんの姿がありました。スタッフに質問され、周りの子たちが助け船をだし、ようやく発表していましたが、ずっと続けていたところ、年度末のほうでは、今日の活動と感想、取り組んだ掃除について 1 人ですらすらと発表できるようになってきました。つい先日の発表では、1 日の流れにも書いていなかったことを A ちゃんだけが発表の中で発言し、A ちゃんのこの 1 年での変化に驚きました。ほかにも、ことばの少ない B くんが手を挙げていつも同じ内容ですが、発表してくれるようになってきたこともうれしい変化でした。

ばる・あみに分かれる前は、参加意欲が低めの子どもたちだと思っていましたが、子どもたちに合わせた活動に取り組んでいく中で、子どもたちが意欲が低かったのではなく、スタッフ側が子どもたちの参加したい気持ちが高まるような活動を提供できていなかったことを反省しました。子どもたちは、一見すると自分のことだけで精いっぱいのように見えてましたが、本当は小さい子のお世話がしたかったり、お手伝いを一生懸命頑張る、「大きい自分」になりたい気持ちをたくさん持っていたことにも気づきました。

#### これからのばる

ばるの子どもたちは、知的障害や肢体不自由があるがゆえに、何をするにもゆっくりペースの子どもたちです。着替えもゆっくり、おやつもゆっくり、そうじもゆっくりとどの場面においても時間がかかってしまいます。また、話し合いも同様で、うまく言葉にできなかったり、イメージする力が弱かったり、恥ずかしくて発表できなかったり、自分の意見を言えても、他の子どもの意見に耳を傾けることが難しかったりとなかなか話が進みません。土曜日のはじまりの会で、午前中に行く公園を決める話し合いをすると 30 分ほどかかってしまい、スタッフの方が「あそぶ時間なくなっちゃうよ」と思わず声をかけてしまうこともありました。

そんな子どもたちなので、土曜日や長期休暇中の活動の中で設定する「すきなあそび」の時間もみんなと過ごすことが多くなっています。見方によっては、「おともだちと一緒に楽しいから」とも受け取れますが、一方で「特にすることがないから」とも受け取れます。

活動が決まっていれば、参加したい気持ちは強い子どもたちですが、「自分が何をやりたいのか」という気持ちが少し弱いように見えます。また、現在の遊びや活動に満足していて、「あこがれる」気持ちも少し弱いようです。話し合いなどの際にもっと子どもたちから意見を出してほしいという話がスタッフ間で出ます。もちろん、スタッフの力量不足で子どもたちの要求を引き出し切れていないところもあると思います。ですが、スタッフも専門性を磨きながら、併せて、子どもたちの遊びや活動、生活そのものに広がりをもたせ、子どもたちが「もっとこうしたい」「よりすてきな自分になりたい」というあこがれをもって、「生活の主人公」となっていくこと、それを実現できるようスタッフが支援していくことがこれからのばるの課題となるのではないかと考えています。

## かっぱおやじとの遊び(3 歳児クラスの実践から)

### はじめに

3 歳児のすみれ組は、男児 11 名、女児 7 名の 18 人クラス(うち 2 名が療育センターとの併行通園)を保育者 2 名で担当しています。4 月当初は物の取り合いから起こる噛みつき、ひっかき、自分の思い通りにならないと叩く蹴る、罵声をあびせるなど、落ち着かせることがとても大変な状態でした。散歩先でも崩れるといつまでも大泣きで座り込む場面も見られ、園まで戻るのに時間がかかることもありました。そこで、子どもたちが気持ちよくかかわることが出来るように担任同士で話し合い、次の目標を立てました。一つは 一人一人の思いを丁寧に受け止めながら、安心して自分を出せるようにする。二つ目は子どもたちがやってみたいと思う楽しい遊びを保障しながら、みんなと一緒に楽しいと感じられるようにする。そうした活動を通して「いっちょまえ意識」を膨らませていきながら、誇り高き 3 歳児さんになって欲しいと、願いを持ってスタートしました。

### しごとへの憧れ

給食の準備や片づけ、午睡後の布団の片付けなど保育者のしている姿を見つけ「手伝ってあげる」という子どもたちが出てきました。そこで、子どもたちがやってみたいと思う仕事は、出来るだけ一緒にしながら活動を保障することにしました。午睡の準備や片付けでは「ぼくたためるよ」と手伝いを始める S 君。そんな姿に「私もしてあげる」と、嬉しそうにお手伝いに加わる子どもたちの姿が見られました。仕事が終わった後は「先生助かったなあ」と言うと、少し得意げな表情を見せる子どもたちでした。給食前の準備では、バケツ運び、お茶運び、歯ブラシコップの準備、台ふき、お弁当配りなど、着替えが終わった子ども達から、「先生私もする」と言って「〇〇をしたら〇〇をする」という生活に見通しを立てて動くようになってきました。こうした姿が見られるようになってから、これまでなかなか着替えに取り掛かれなかった子どもたちも、着替えをサッと終わらせてお手伝いを楽しむ姿がありました。でもすぐに順調に言ったわけではありません。布巾や雑巾を絞る手伝いでは水遊びに発展してしまい、あたり一面水びたしになることもありました。また、お手伝いの取り合いや、自分の準備は自分でやりたい!などの思いから、友だちとぶつかり合いになってしまうことは日常茶飯事・・・。それでも、「みんなはこんなことが出来るようんあったんだね先生嬉しいなあ」「いつもありがどうね」と、子どもたちが出来る姿をみんなで認め合うことを心がけました。そうしていく中で、徐々に子どもたちにお手伝いしたい気持ちが膨らみ、積み重ねることでやり方を学び、上手になっていって行きました。そんな中で着替えをまだ一人で上手く出来ない E ちゃんに、「てつだってあげようか」と、優しく声をかける H ちゃんの姿がありました。E ちゃんもそんな H ちゃんの言葉が嬉しくて「うん」と頷き二人と一緒に着がえをする場面が見られました。お手伝いされる側もする側も、なんだかとっても嬉しそうでした。また、給食の場面で箸箱を上手く開けられない友だちを見て、「開けてあげようか」と声をかける K 君や H 君がいました。まだまだお当番活動には発展していませんが、子どもたちの仕事への憧れの気持ちは大事にしていきたいと思っています。

### みんなと一緒に楽しめるあそびから ～かっぱおやじのお話～

9 月に入り、大好きな毎日のプールが終わってしまったことや、クラスのリーダー格だった子が転園してしまったことも重なったのか、ようやく落ち着きを見せ始めていた子どもたちが、なんとなく落ち着かなくなっていました。すぐにお友だちに手が出てしまったり、自分のことばかりで相手の気持ちを考える余裕が見られなくなっていました。お手伝いを通して、自分たちの事は自分たちでしていける姿

が誇らしいと感じているようにも見えましたが、みんなの憧れだった友だちがいなくなったことは子どもたちには大きな不安につながったのか、少し悪い方向へ流されている感じが見られました。そこで「みんなでワクワクドキドキする活動を共有しよう！」「子どもたちの気づきやささやきを丁寧に受けとめながらみんなの中に返していこう」と、考えました。絵本が好きな子どもたちだったので、特にお気に入りのカップおやじの絵本を通して、カップおやじのお話を広げながら運動会に向けて取り組むことにしました。そしてカップおやじからの手紙から、イメージの世界を共有しながら遊びを広げていくことにしました。

### 10月1日カップおやじから手紙が

朝の会の時に「あ！！みんなに知らせたいと思ってたことがあったんだ！！」という、子どもたちは「なにになに？」「どうしたの？」と耳を傾けてくれました。「先生の家からね、手紙が来ていたのよ！」と話すと、子どもたちは「誰から？」「ねずみばあさん？」「カップおやじ？」と、すぐにピンときた様子。「あのね、昨日ね、先生の家にかップおやじから手紙が来たの。すみれさんへって書いてあった」と話し始めると、目をまんまるにして聞く子や、少し不安そうな表情を見せる子どもたちもいました。「あのね、いつも、長いかップおやじの絵本を静かに読んでくれてありがとうってかいてあったよ」というと、途端にホッとした顔で「カップおやじ優しいね」という声が出ていました。「カップおやじね、ひまわり園の場所が分からなかったみたい。だからね、先生が手紙を書いて、ここの住所を教えておいたからね～」とあって、カップおやじの本を読むと、どの子も最後まで集中してみている姿がありました。

### 10月2日手紙が届く

部屋の時計に、緑色の手紙を貼り付けて置いたのですが誰も気づかないので、朝の会で運動会の全体練習があることを伝え、「時計の針が〇〇になったら・・・」とみんなに時計に注目させたところで、「あ！なんか緑のものがある！」とRちゃんが気づき、みんなはびっくりしていました。手紙には、「すみれのみんなへ。いつもカップおやじのえほんをよんでくれてありがとう。ながいおはなしをよくきいているな。すみれのみんなはとてもげんきだからだいすきだ。ケンカもしているようだな。いつもみんなのことをみているぞ」。

手紙はみんなのところにとても残ったようで、運動会の練習後はみんなでカップおやじ探しの散歩に出かけ、「カップおやじの足あとかもしれない」などとイメージを膨らませながら楽しみました。

### 10月10日（運動会前日）

2度目の手紙が届きました。「すみれさんへ。てがみをかいてくれてありがとう。いえにもってかえって、ゆっくりよんだぞ。あしたはうんどうかいがあるんだな。がんばれよ。どきどきするやつは、こおりぎとうをたべればゆうきがでるぞ。すいじんさまにおいできた。」

読み終えると、「水神様だって～！！」とすぐにお散歩に行く気満々。出発し、水神様の階段を上ると、木の上の方に、金のひょうたんと、緑の包み紙に包まれたものが引っかかっている、自分たちで登って取っていました。すぐに包みを開けてみると、氷砂糖が入っていて、「これを食べれば勇気が出て書いてあったね！」と話すと、子どもたちの目がキラキラして見えました。氷さとうを口にしたら子どもたちの心は、ウキウキで「手を使わないでこのぼれる！」と急な斜面の土手を登ったり、「なんだか元気がでた～！」と叫んだり、「げんきもりもりで、早く走れる～♪」と、面白いダンスを始める姿も見られ、みんなで笑いながらダンスを真似してみんな笑顔が一つになった瞬間でした。翌日の運動会では、練習の時高いところが怖くてなかなかできなかった子がすんわり出来ていたり、運動会前は不安でかなり揺れている子が巧技台の競技に参加できたりと、少し大きくなった子どもたちの姿を見ることができました。

### 落ち着いたように感じられたけど・・・

運動会が終わった後は、子どもたちの様子がぐっと落ち着き、いつも衝動的でカッとなり手が出ていた子が、手を出さずに口で伝えたり、噛みつきもほとんど見られなくなりました。ですが、落ち着いた様子に見えていた姿も、後半になるにつれて自分の思いが通らないと崩れてしまったり、製作でうまくでき

ないとくずれてしまったりと揺れる姿がありました。一方的な理由で友だちをぼこぼこにするまで手を出してしまったり、一旦カッとなってしまうと自分を止められなかったりと気になる姿も出てきて保育者もとても不安な気持ちになりました。クラスの中で一番気になったことは、友だちに対しての思いやりが感じられないこと、「強さ」をはき違えていることで、S君やY君など自分と意見の合わない子に、すぐに「ぶっ飛ばすぞ!!!」など暴言を吐いて泣かせてしまうこともよくありました。何が子どもたちをこんなに不安にさせているのだろうかと思ひ悩み日々でした。とりあえず、今できることをと思い、子ども達の揺れる姿に寄り添うように心がけましたが、あちらこちらで起こるトラブルに不安が広がっていたように感じます。そこで、毎日の活動であるお散歩でわくわくできるように、森探検を試みたり、かっぱおやじからの手紙を計画していきました。

## 優しさの石・勇気の石

3月24日

ひさしぶりにかっぱおやじから手紙と場所を記した記号が届きました。「もうすぐおおきいぐみになるんだな。おまえたちにとくべつにおおきくなるためにひつようないしをやる。もりにおいておくからさがしてみる。」とのこと。みんなでわくわくしながらその場所に行き、探してみると1つの大きな石が新聞紙にくるまっていて、中の手紙に「これはやさしさのいしだ。おまえたちのやさしさをひきだすパワーをもっている。つぎは、〇〇にゆうきのでるいしをおく。」と書いてあり、大きくて綺麗な石をうれしそうに見つめる子どもたちでした。

次の日に同じ場所へ行き、たくさん探してみるとまた新聞紙にくるまった石が出てきて、今度は小さな石がみんなの人数分ありました。とても喜ぶ子どもたちで、とても大事そうに持っていました。

園に帰ってからも優しさの石や勇気の石を触ったりして、「パワーがわいてくる～」と言ったり、いつもなかなかやる気にならない帰りの準備が早く終わったりと、少しは効果があった様子でした。

## 1年を振り返って

まだまだ行きつ戻りつの子供たちですが、子供たちの揺れる姿には大きくなっている自分とそうではない自分との間で「頑張りたいけど頑張れない」自分を感じての現れかもしれません。手伝い活動では“自分も出来る”と、大人への仕事に憧れその活動が保障されていることが子供たちの心に「いっちょまえ意識」を膨らませていくことにつながって行く事を感じました。かっぱおやじの活動もみんなでわくわくドキドキしながら、イメージを共有し遊びを膨らませていくことが出来た事はとても良かったと感じています。ですが、子供たちが仲間の中で安心して気持ち良い関係を作って行くまでには至りませんでした。お手伝いの活動も、自分たちが主体的になり「自分の事は自分で出来るよ」という活動になるまでにはもう少し時間が必要です。ですが、子供たちが仲間の中で気持ち良い関わり方を学んでいくためには、共感し合える楽しい活動が保障されることが大切と言う事を改めて考えさせられました。3歳児の誇りを育てるとい目標を掲げて取り組んできましたが、子供たちが自分の力を信じて主体的に活動に参加出来るためには、私たち保育者がどんな眼差しで子供たちを見つめ、具体的にどう働きかけていくかをこれからも職員集団みんなの学びにつなげていけたらと感じています。

「自然の中で育まれる感性とまなび」

## ～あまーい、すっぱい、美味しいね～春の活動より

### ～はじめに～

幼い療育のきょうだい児預かりの場として誕生したぽかぽかむぎっ子保育園も、認可外保育園として地域にうまれて早くも三年目。0歳からの発達を丁寧にとらえた個々にあった保育を重ね、異年齢児で共に生活し、お互いに響きあい、刺激し合える集団づくりをしています。

以前から変わらず大切にしていることは、なんにでも興味を持ってまずやってみる、ワクワク、ドキドキ、時には失敗してもいい、「もう一回！」安心できる大人に見守られ何度でも挑戦することの大事さ、そして出来た時の喜びを共感しながら毎日を過ごしています。保育園は平屋民家、とても自然豊かな環境で、子どもも親も保育士も居心地の良い“みんなのおうち”として根付き、日々の実践がぬくもりいっぱいです。そんな日々の実践の中から今回は春の自然活動を記録報告したいと思います。

## ◆庭に実る豊かな果樹とみんなの畑

### \*春の自然はあそびの宝庫\*

ぽかぽかむぎっ子保育園は木々が多く、桃・モクレン・ツツジのトンネル・紅葉の登り木・果樹・むかご…森のようなお庭。そして毎年のことながら畑は一年中植えたり収穫したりでにぎやかです。そんな園の春は、楽しく忙しいものです。今日の給食で使うかなあ…と給食先生に聞きに行っては、人参の収穫・洗い・届ける。

「今年は何つくる？」「今年もしたいね、食べたいね」と何の種を蒔こうか考えたり、土を掘って遊んだり。そうすることで、まず食育の始まりですが、それだけではありません。苗をじっくり観察したり比べたり、変化に気づいたり花を知ったり。今年豊作で花の観察用に置いておいた人参の花もついこの前咲き、一つの花が無数の白い花でできていて、それがすべて種になることを知ったばかりです。そんな体験での子どもたちの気持ちのふくらみはとても大きく、一緒に驚き、喜び、毎日が小さな冒険です。そして、そんな畑や木々には、たくさんの虫や鳥たちがやって来てまた一つ楽しみが増えます。「うわー、なんかでてきたー！」「今日はどこにいるかなー？」と土掘り。そこで身につけるのは興味・探求心だけでなく、土を掘る力や体の動き、協力して掘る仲間との共感等とたくさんの事。毎日虫とあそぶ子どもたちです。鳥も様々やってきます。鳴き声の違いに耳を傾け、楽しみます。木々につく害虫を餌にキツツキも訪れます。そんな木を高く見上げ、どんどん登る力もたくましくなってきた子どもたちです。自然の中で、さまざまな力や感性を身につける子どもたちに、次は一緒に何をしようかなとワクワクする今日この頃です。

### \*春の味覚、サクランボと桑の実\*

認可外保育園の開所でお祝いに頂いたサクランボの木、少しずつ身をつけるようになりました。「桜の花とおんなじだ」庭で咲いたサクランボの花に気づいたY君。「ほんとだ、きれいだねー」と一緒に見上げながら

“早く実になるのを待っているから気づいたかな”と思う日があった初春。それからみんなで待とうと、どうなったらサクランボになるかを伝え、日々観察するようになりました。みんなのあそび場の土山横にあるサクランボの木、「まだかなー？」といつも観察ができ、青い実がつくと、「きてきて！サクランボができた！」と目を輝かせておしらせに来る子どもたち。「んー、サクランボってどんな色？」と聞き、絵本をみたりして「あか！」。「じゃあ、そうなってからかなー」ともう一待ち。毎日ワクワクして待ちました。そんなある日の朝、Aちゃんが、「サクランボ、たべたい」といいにきました。どれどれと見に行き、赤い実を発見。「よく見つけたねー」と収穫していると、「なにしてるの？」とすかさず気づく子どもたち、あつという間にサクランボの木を囲み、「ぼくも！わたしも！」と手が伸びました。「自分で見つけたものを食べようか！」というので、一人ひとり指さして見つけ採って食べました。そこでの真剣なまなざしは可愛く、競うことなく自分の分を見つけて満足して一粒を大事そうに味わうひとときでした。この活動で大切にすることは、(いつもみんなに平等に待つ事をしているので焦ることなく争わずの状況があるうえで)「サクランボができてよ」と声をかけるのではなく子どもたちが気づくのを待つこと、「はい、〇〇ちゃん分」と採ってあげるのではなく“これ”と自ら選んだものを食べられるようにしたこと。そうすることで子どもたちは“サクランボを食べた”というだけではない満足感を得たように思います。食べて、「どんな味？」と聞くと「甘いよ」と嬉しそうでした。その後も物語は続き、種をまいたらまたサクランボが出来るだろうかと畑に植える子もいたり、長い時間続く活動でした。

その後、サクランボもなくなり、お庭で思い切り遊ぶ日々の中、今度は外庭広場の桑の木に今年は豊かに実がなりました。今度は気づいたのは保育士のほうが早かったですが、食べられるかを試したうえで子どもたちに話しました。黒くなったら食べごろの桑の実、現在赤は赤い。「たべてみる？」と子どもたちに聞いて食べることで自分たちで食べられるだろうと思うものを採って食べました。食べ方はサクランボで学び済み。「どう？」「すっぱーい！でも美味しい！」と子どもたち、少し食べたうえで、「また、黒くなったらすごく甘くなるよ！楽しみに待とうね。」とその日はおしまい。数日して食べごろになった実を食べました。一つ採っては中庭に洗いに戻りまた採りに来る。次からは手のひらにのるだけのせて洗いに走る子、また次は桶を持ってたくさん摘む子、洗うのも一つひとつから桶ごとに変わる子…考えたなーと見ていて感心したり子どもの育ちを発見する機会にもなりました。そして、一度一度洗って食べたい欲求のために走って往復する足腰の運動にもなっていました。楽しみに待った熟した桑の実、「あまーい！」とほっぺを両手で覆いとろけそうな顔の子どもたちでした。小さな生きる知恵は今後の育ちと学び、生きる力にとっても大事だと思うひとときでした。

こういった活動をはじめ、運動遊びやお話ごっこ遊び、描画活動等、すべてにおいて大切にしていることは、発達や課題はもちろん大事にしながら保育しますが、大人は前を行くばかりではなく、まず子どもの表現を根気強く待つことをし、そこでたくさんの発見をし、その子どもたちの姿をまん中に実践を組み立てることも大事にして日々過ごしています。

## ～さいごに～

豊かな自然の中で、あそびながら自然となんでも自分でやってみることのできる環境…そしてやってみて喜んだり悔しがったり、出来た自分・手ごたえに気づいたり…。様々な経験を通してたくさんの事を感じ、共感し、好奇心旺盛に過ごすこと、できる限り子どもたち自身でやりとげる達成感と自主性を大事にいつも応援団として共に過ごす保育士、そんな生活がとても重要だと実践のたびに感じる毎日です。発達の違う異年齢保育も、もちろん一人ひとりの成長課題を大切にしながら繊細に配慮しながらですが、みんなで共に過ごす家族の

ような取り組みの中、お互いに刺激し合い、思いやり、自然にかかわり合う仲間集団ができ、相変わらず子ども  
もの大きな可能性と手ごたえを感じさせてもらっています。今年も、楽しく子どもも大人もともに成長する豊  
かな保育実践を積み重ねたいと思います。



## 子どもの本当の願いに気づけているか

### 1. はじめに

子ども家庭支援センターみらいは、3歳児9名、4歳児19名、5歳児22名、計50名の子どもたちが通園しています。発達段階によって、親子グループ、母子分離の年中児を中心とした2グループと年長児を中心とした3グループに編成されています。幼稚園、保育園と並行通園している子どもたちですが、不安が強く、なかなか自分を出せない子や、気持ちの切り替えが難しい子、集団の活動に入りにくい子などが療育を通して、自我をしっかり育て、拡大、充実へと向かっていくようにと発達段階に応じて日々の実践を積み重ねています。

年長児22名は、発達段階を考慮して3グループに分かれています。その一つで、週2日午後から登園してくる「にじグループ」がありますが、今年度は、1学期のキャンプに向けての実践段階で子どもたちの関係作りが難しく、崩壊寸前まで行きました。そんな中にM君はいました。M君は自分の思いを相手に伝えることが難しく、突発的に手が出てしまったり、乱暴な言葉になってしまったり、人との関係性に困難を抱えていました。安心して自分を出せるようになり、仲間の存在を大切に思えるようになってほしい。M君が仲間の中で自分を発揮し、仲間と心地よい関係を作れていけるような実践に取り組むことにしました。以下、M君の変化を中心に、にじグループの実践を報告したいと思います。

### 2. にじグループについて

にじグループは、年長児7名（男児6名 女児1名）の子どもたちで、その中に自閉症スペクトラムと診断された子が3名、ADHDの子が1名います。知的には問題のない子供たちですが、友達と一緒に遊ぶより自分の好きなことをして遊ぶことが多く、集団に入りにくかったり、相手の気持ちが分かりにくく乱暴な言葉を吐いてしまったり、状況や場面の理解が難しく突発的に手が出てしまったりする子どもたちでした。自由遊びもそれぞれで、鬼ごっこが始まっても、鬼になることに抵抗があり、捕まると泣く子、怒って鬼に攻撃的になったり、なかなか続きません。実践も、子どもたちがつながる遊びをと考えるのですが、一人が「やらない」と言って倉庫に入ると、つられて他の子も入ってしまい、なかなか出てこない。子どもたちの心をつかむことが難しく、職員集団で検討を何度も何度も重ねていきました。

### 3. M君について

M君は、5歳3か月で自閉症スペクトラムと診断されています。知的には問題なく、自分のことも自分でやっていきます。「先生、みてて」と自分のできることを見せてくれ、褒められることがうれしくて、できることはやるのですが、失敗や間違いを受け止められず、できなさそう

な事には向かえない姿がありました。また、自分より友達ができることは許せず攻撃的になってしまい、突発的に手が出てしまった後は、気持ちをコントロールできず、大声を出したり、掲示物を破ったり、物を投げたり・・・止めるスタッフも何度もたたかれました。そんな姿に、M君のどうしていいかわからない苦しみを感しました。家庭環境も複雑で、両親の仲が上手くいっておらず、父親がほとんど家に帰ってこない状況でした。母親が別の男性と交際を始め、家ではあまり困った様子を見せないM君でしたが、みらいや幼稚園では、不安定な姿が見られました。そんなM君は、家族の中で心から安心して過ごせているのだろうか。みらいや幼稚園でも、本当はもっと友達と仲良く遊びたいのではないかと思いました。

#### 4. 自分を好きになり仲間の存在にも気づいてほしい

M君に自分が受け止められているという実感を持たせ、安心して自分を出していけるために、M君の好きな遊びから始めることにしました。

##### ① 大好きなあそびをみんなで

M君の好きな野球なら、M君が仲間の中で自分を発揮できるのではないかと思い、M君の発言を大切に、野球あそびをみんなで取り組むことにしました。「バットをつくったらいんじゃない」「ボールもつくろう」新聞紙を使ってM君が、ボールやバットを作ると、他の子どもたちも一緒になって作り、点数表も作って、みんなで野球を楽しみました。大好きな野球を仲間と一緒にできたことで、他の子どもが野球遊びから離れて野球が中断しても、戻るまで待つてあげることができました。

しかし、活動の中で公園に行った時の事です。他の子どもから「サッカーしよう」と声が上がりました。サッカーのルールを良く知らなかったM君は、友達に「こっちチームからキックだよ」と教えられたことから攻撃的になり、点数が入られると、相手チームの子に向かっていき、蹴飛ばしました。泣き崩れた相手の子と気持ちがおさまらないM君、それぞれをスタッフが受け止め対応しました。どう対応すればよかったのか、スタッフで話し合いながらも考える日々が続きました。悩んでる矢先、園長に「仲間の中でのM君と他の子どもとの関係性をどう大事にしているの?」と投げかけられました。「なぜトラブルの時も子どもたちの中で向き合わせないの?」と。トラブルの際も、それぞれの子どもに対してスタッフが気持ちの受け止めをして終わっていたこと、攻撃的になるM君に対してスタッフがどこかM君を気遣いながら対応してきたことに気付きました。

##### ② 仲間と力を合わせて(長縄)

年が明けて、子どもたちの卒園の日も意識するようになり、子どもたちがもっと仲間を感じて、仲間と力を合わせてやれる活動を…と考え、子どもたちが遊びの中でやっていた縄跳びをつなげて長縄に挑戦していきました。M君も縄跳びは、よく自由遊びでも取り組んでいて、長縄にも意欲的に挑戦していきました。上手くいく日もあれば、なかなか跳べずに、引っかかった子を責めてしまうこともありました。そんな中で、縄跳びを二つ繋いだものでは跳びにくいことに気づき、長い布を裂いてみんなの長縄を作ることにしました。女の子が、三つ編みを知っていて男の子た

ちが三本の布を女の子の声掛けで移動しながら編んでいきました。交代したM君が、何気に手に持った小さい縄跳びを突発的に窓から外へ投げてしまいました。とっさのことに慌てましたが、たまたま相談支援員が見ていた子に「〇〇くん、どう思う？」と尋ねると「いけないとおもう」といつもM君の言動につられていた子が答えました。その時M君は、はっとした表情を見せました。その後、M君は崩れることなくその子に向かうこともなく縄跳びを拾いに行きました。長縄を作り、別の子に交代した矢先でした。やることがなくなり、何をしていたかわからなかったのだろうと思います。長縄を編む反対側を引っ張ってもらうなど、M君にしっかり役割を伝え、「M君が支えてくれているから、みんながどんどん編んでいけるね」と評価すると、また縄を編みはじめ、最後まで仲間と一緒に長縄を編み続けることができました。その日は、相談支援員に入ってもらい職員間でなぜ縄跳びを放り投げたのか考え、反省しました。「どうしたかったの？」「～したかったんだね」「こうしたらいいんじゃない？」といった私たち大人の言葉ではなく、いつも自分を一目置いてくれる友だちに言われた言葉が、M君をはっとさせたことに気付きました。その時以前、園長から言われた「子どもたち同士を向き合わせる」という言葉を思い出しました。M君自身も「いけないこと」と本当は分かっているだけに、友だちから言われたことで、初めて少し恥ずかしく、しなければよかったと感じたのではないかと思います。

卒園間近、私にM君が手紙をくれました。「みわせんせい」と書かれた笑った似顔絵でした。園長に「M君はこの絵で何を語っていると思う？」と問われ「どんな時も、何をしても、いつも笑って受け止めてくれてありがとう」と言われてる気がして、M君の口ではうまく言えない心の中の声を感じて涙があふれました。長縄を仲間と一緒にとべたことをよかったと感じ、にじグループの仲間と一緒によかったと感じて卒園を迎えてほしいと強く心に思いました。

長縄を、子どもたちがそれぞれ自分で何回跳ぶか目標を決めて跳んでいきました。失敗しても、また挑戦する姿も見られました。最後は仲間とみんなと一緒に挑戦です。なかなか続けて跳べなかった長縄でしたが、「卒園を祝う会」で保護者や他のグループのみんなの前で、「どんまい」と声を掛けあいながら、頑張りました。そして初めてみんなで15回跳べたあの子どものキラキラした顔。本当に誇らしく私の心の中で輝き続けています。

## 5. さいごに

日々子どもと関わる中で、子どもの言動から子どもが今何を求めているのか、どんな願いがあるのか、その事柄の背景をしっかりと考える必要性があり、頭で分かっているものの、実際の実践の中の子どもの姿からすぐに理解し、判断して対応することはなかなか難しいことでした。子どもの本当の願いをしっかりと受け止め、実践の中でどう関係を作っていくのか。実践の中で、仲間の中の自分を感じる場面、子ども同士が向き合う場面を逃さずしっかりとらえ、丁寧に対応していくことが大切だと感じました。そして実践が、子どもたちの内面を理解し、主体的に取り組める内容になっているかも今後の課題として職員間で話し合いながら、子どもの本当の願いに寄り添える実践を作っていけるように努力していきたいと思います。

## 仮説をたててとりくんでいく みんなで分析・みんなで仮説

### 1 たこ焼きづくりでのイラだちを抑え切れず

「少ない、もっとかけろ」とA児が反抗してきた。私は言葉づかいも気になりながら、「ちょっと待って、出てきにくいから」ともう一度、たこ焼きにかつお節をかけようとした。その時、A児が「早くかけろ」と言いながら近くにあった空の皿を投げてきた。周囲にいた友達にギリギリ当たらなかったが、机やホワイトボードを蹴りはじめた。このままでは周囲にいる友達にあたるといけないと思い、A児と話をしようとして別の部屋に移動させた。

A児は足で、私や近くにあった机を蹴り激しく抵抗した。このままでは、收拾がつかないのではと困っていた私とA児の間に、他のスタッフがA児をギュッと抱え込み「何があったの」と声をかけ、涙を流しながら「むかつく」などイライラした思いをスタッフに聞いてもらっていた。私とA児の間に入ってこれ、一先ずA児も落ち着き始めた。

A児は、なんで自分だけたこ焼きを食べれないのか、部屋を出ないといけないのか分かっていない様子であった。

仲介に入ってくれたスタッフがA児をじっと抱き落ち着いて話をしてくれたことで、私自身も冷静になってA児とのやりとりについて振り返った。

クッキング活動でのA児は仲間の中心となって取り組む姿がみられる。たこ焼きを焼いている時には、竹串で反転させる作業を得意気にやってみせ、友達に「こうすればいいんだよ」と友達のモデルとなっていた。たこ焼きを皿に取り分け、トッピングにソースやマヨネーズなどA児が自分のたこ焼きにたっぷりかけていた。他の友達のを心配し、「少しずつかけてね」と声掛けをするが、聞いているようではなかった。かつおぶしをスタッフ（私）にかけて周り、A児にかけてあげた時に、初めにふりかけた時にかつお節が少ししか出てこなかった。

A児の「早く食べたい」気持ちがあるのに、少しもたついていた私の動き（かつお節をかける）で苛立ちを抑えることができず、追い立てる言い方や暴れることでA児の感情をぶつけてきたときに、もう少し丁寧な対応や声のかけ方、A児の気持ちの高ぶりを理解しての対応の仕方はどうすればいいのだろうか、A児の対応について深く考えるきっかけとなった。

「ゆめの樹」勤務3年目の私。数年前まで養護教諭として働いていた私とは違った方向から子どもたちと接し、向き合う中で日々いろいろなことを感じ・考えるきっかけをもらっている。対応や声かけの仕方を、共に活動するスタッフから学び、助言を受けてきたこと、及びA児の行動や発言に疑問をもち、気づかされることがあった。

## 2 A児について

小学3年生のA児（広汎性発達障害、ADHD）は、昨年4月から「ゆめの樹」へ登園するようになった。以前通っていた放課後デイからの引継ぎでは、A児と同じく昨年4月から本園に通うB児、C児と室内で走り回るなど、やんちゃな姿があり職員も困っていた様子。「3人が一緒になると大変」との引継ぎもあり、本園でのグループわけでは3人が重ならないようにグループ編成をし、対応していた。

昨年4月から各グループに入って活動する中では「少し元気かな?」と始めの頃の私は感じるぐらいであった。

## 3 キラキラと輝くA児

入所当初、けん玉を持ったA児にスタッフから「けん玉名人のA君のけん玉ショーが始まるよ。」と声をかけると、みんなの前で少し照れ恥ずかしがりながらも、みんなからのあつい視線を受けてけん玉を見事に成功する姿は、とてもかっこよく、みんなから拍手喝采を受け、A児も少しホッとした様子で、また得意気に次々とけん玉を披露し、A児に憧れて「僕もけん玉やりたい」と仲間のモデルとなることができた。

クッキングも得意で「卵を片手で割れるよ」と自慢げに割って見せる。家でも簡単なおやつをつくる手伝いをしているようで、クッキング活動になると、みんなのリーダーとなって作業をすすめる姿があった。

夏のキャンプでは、同じグループに年下の仲間もいたので、やさしく声掛けを行ない面倒を見てくれる姿もあった。家では弟たちの面倒をみているのか、キャンプの日の夜に寝つけぬ子に「ねんねしよう。」とやさしく声をかけて隣で手を握って寝る姿もあった。

そんな頼もしくかっこいい姿もある中、だんだんA児も本園に慣れ、安心して過ごすことができるようになった1月頃から、少しずつ本児の思いや気持ちを抑えられず、衝動的な行動が多々みられるようになってきた。

## 4 登園してすぐに粗暴な行動をとるのは

学校へ迎えに行き、送迎車が本園の駐車場に着くと、荷物も持たずに車から飛び降り、駐車場に敷き詰めてある砂利を投げてみたり、園舎の裏の土手を登って大きな枝を見つけ振り回したりと、人にモノが当たると危険な行動を悪気もなくやっていることが、1月頃からあらわれるようになった。

スタッフが「おかえり」と声をかけると、そのスタッフを叩いたり、石を投げるマネをしたり、時には本当に石を投げてもある。

A児に近づけば近づくほど抵抗が強くなることもあり、荷物を持って玄関に向かったと思ったら、次は庭で地面を掘り始め、なかなかスムーズに部屋に入り着替えをすることができない日が続く。

庭で土遊びや草木を集めたりと、一通りやりたいことを済ませ、A児が興味が湧く活動へのきっかけを見つけると集団と一緒に活動することもある。しかし、その中で自分が決

めた遊びができなかったり、遊んでいる途中で終わりの時間がきたり片づけをすることになると、物を投げ・振り回し抵抗をすることもある。

A児がこのような行動をとるのは、いくつかの要因があると考えた

①注意喚起

私と一緒にいるスタッフ、友達の注意を引こうとする行動

②家庭・学校でのストレス

家庭…お兄ちゃんとして家事の手伝いや弟たちの面倒、父・母へ甘え足りない

学校…昼休みに終わっていない宿題をしているため、遊べていない

③悪が大好き

「嫌だ」「やめて」「ダメ」など大人や友達がやってほしくない事をやり遂げた時の達成感を味わいたい。

例えば、落とし穴を作りたいと、夢中になって穴を掘り仕掛けをつくり、長いこと集中して作業をし完成させる。友達が落とし穴に落ちたことを知るとニヤリと笑って喜ぶ

## 5 みんなで分析、みんなで仮説

A児の行動について、実践の打ち合わせ・反省・職員研修やケース会議などの機会にA児のことについて以下のようにスタッフみんなで分析、仮説しみんなできりくんでいこうとしている。

①A児の気持ちの受け止めや代弁をする

- ・送迎の間に、本児が思っていること、やってみたいことに耳をかたむけ丁寧に聞き取りをおこないながら、活動に向けての気持ちを整える時間をつくる。

- ・本児がやりたいこと、思いを友達やスタッフにうまく伝えられない時には、聞き取りをおこなったスタッフが間に入り代弁をし、本児の気持ちを伝えたり、相手の気持ちや考えを伝えたりできるよう対応の仕方をスタッフ間で連携とれるようにする。

②「悪」が大好きな子がワクワクする実践づくりをする

- ・体全身や感覚を使って、泥んこ遊びや水遊び

- ・新聞紙や段ボールなどで剣や盾を作ったの戦いごっこから、剣道やスポーツチャンバラなどスポーツへと繋げていけるような遊び。

- ・山登りや散策など、自分たち（子ども）の力で冒険しながら目的地まで行き、ドキドキしながらも達成感を感じる事ができる遊び。

まだまだ、A児の対応については途中経過ではありますが、A児だけではなく「ゆめの樹」に登園してくる一人ひとりの子どもたちがワクワクするような実践づくり、仲間っていいな、キラッと輝く瞬間を見つけ友達同士で憧れが持てるような集団での時間も大切に、スタッフ同士が対応の仕方や困っていることなど互いに出し合い、みんなで分析・みんなできりくんでいながら日々の実践に今後も取り組んでいきたい。

## 仲間の中で育つ気持ちの育ちを見つめて

### 1 新しいゆめの森で～ゼロからのスタート～

私たちの学齢期部門では、障がいのある学齢期の子どもたちや保護者を支援する事業所として、「子ども家庭支援センターゆめわかば」、「学童支援ゆめの樹」の 2 事業所に加え、新たに 3 つ目の事業所として、平成 27 年 4 月に「学童支援ゆめの森」を誕生させました。そして「ゆめの森」は、最初の 1 年間は、吉野町の住宅地にある古民家で事業を行いながら、法人・事業所・スタッフ・保護者が協同して、今年度には「ゆめの樹」の隣の敷地に新園舎を建設する動きを進めています。

しかし、「ゆめの森」を開所するまでは、いろいろな困難もありました。最初は、吉野町の住宅街の中にある一軒の古民家の掃除から始まりました。埃っぽい家の中に入り試しに水道をひねると、褐色の水が……。掃除のために畳を上げるとたくさんの埃と虫が……。本当にゼロからのスタートでした。

入居準備期間わずか 1 ヶ月でしたが「ゆめの樹」、「ゆめの森」のスタッフの脅威の奮闘でなんとか、「学童支援ゆめの森」は、平成 27 年 4 月 1 日に開所しました。

庭にはたくさんの樹がありましたが、中でも真ん中にあるしだれ梅が満開で、これからこの場所で梅の花のように子どもたちの笑顔が満開になるようにしていこうと決意を新たにしました。

### 2 スタッフみんなで「ゆめの森」の実践を新しく創造していく空気づくりから

「ゆめの森」が開所しての最初の職員会議で、小学 1 年生が多いので子どもたちも保護者も不安や期待でいろいろな思いがあるということ、他事業所から移ってきた子どもたちも保護者も不安があるということを通理解し、子どもたちのことについて細かいことまでスタッフでたくさん話し、一人一人の子ども理解を深めていく時間をとりました。

また、職員会議だけでなく、毎日の打ち合わせを始め、事務作業の合間などでも子どもたちのことや実践の内容をどのようにしていくかという話し合いを重ね、「ゆめの森の実践を新しく創造していく」という大きな目標に向かってスタッフみんなが協力する意識と体制が作られていきました。

### 3 子どもたちが仲間と共に育つ実践がしたい。

「ゆめの森」が開所し、スタッフの意識や体制も作られていく中で、私はてぶくろグループのリーダーとして月曜日と火曜日の実践を担当することになりました。

実践の内容を考えていく時にまず行ったのは、「麦の芽学童保育の 4 つの柱」を自分なりに考え理解していくことでした。その内容としては、①遊び文化を広げる②生活をつくる③仕事を広げる④仲間をつくるという内容です。

その中で、④の「仲間をつくる」ということを、今年度のテーマとして実践を展開していきたくと考えました。

「仲間をつくる」実践をどのように具体的に進めていくかを考えた時に、「仲間をつくる」＝「仲間がいるからやってみよう」とか「仲間がいるから楽しい」、「仲間がいるからぶつかる」というように「仲間がいるから〇〇〇」という場面がたくさんあることで、子どもたちが仲間を意識し、仲間を大切にしていけることができると考えました。「仲間がいるから」という場面をつくるということは、子どもたちのその場面場面での気持ちの揺れや葛藤、気持ちへの響きということを経験し、スタッフが見逃さずに受け止め、その気持ちの重なりによる「気持ちの育ち」をしっかりと受け止めていくことが必要であり、受け止められる経験を積むことにより、安心して子どもたちが仲間と共に、活動に取り組める環境をつくっていくことに気配りしながら活動を展開していくことにしました。

#### 4 仲間がいるから買い物活動が頑張れた K くん

K 君は、特別支援学校に通う 1 年生の自閉症スペクトラムの男の子です。発語もあり、自分の思いなどを伝えることができます。毎回の登園を楽しみにしている元気いっぱいの子です。

買い物活動は、年間を通して 3～5 名ずつのグループで、何をかうかという話し合いやメモ作りから始め、計算係りやリーダーなどの役割を決めて取り組みました。

K くんは、その買い物活動が大好きでした。なぜなら、K くんはチラシを集めることやアニメを見るのが大好きで、買い物に行くとチラシを見たり、貰ったり、好きなアニメのお菓子やグッズを見たりすることができ、それを楽しみに買い物活動に取り組んでいました。

そのため年度当初は、スタッフの呼びかけも振り切って、好きなアニメのキャラクターに突進するといった具合でした。

しかし、グループで仲間と一緒に買い物に何度か行っていると、仲間の一人が K くん「K くん一緒に〇〇を買いに行こうよ」と声をかけるようになっていきました。

そして、K くんも買い物に行く時に自分で決意するかのように、「みんなと一緒に〇〇を買いに行くぞ」と言いながら意気込んで出かけるようになっていきました。

しかし、まだこの時点ではお店に入ると、好きなものの所へ一目散といった具合でした。それが変わり始めたのは冬休みの活動からでした。

その活動は「みんなで鍋を作ろう」ということで、鍋の具材の話し合いから始めました。

話し合いの中で、K くんは仲間の発言をずっと聞いていましたが、スタッフが「K くんは何か入りたい物ないの？」と声をかけても「ない。だいじょうぶ。」と返っていました。しかし、何か言いたそうにしていました。

話し合いが終わって買い物をしにお店に行くと、なんとその日は、K くんは自分からグループの仲間と一緒に店内を回り、買う物を一緒に選んでいました。

話し合っていた商品の買い物が終わると、まだ予算が余っていたのでスタッフが



「あともう一つ好きなの買って大丈夫だよ」というと、Kくんは仲間に向かって「おれ、ウィンナーがいい」と一言。

すると周りの子たちも「いいね」と言って念願のウィンナーを買うことになり、ウィンナーもKくんが選ぶことができました。

レジで会計するときも、Kくん晴れ晴れとした表情で、友達と一緒に並んで会計を済ませていました。もちろん鍋を作って食べる時にはウィンナーを笑顔で食べていました。

その時の買い物活動をきっかけに、仲間と一緒に行く買い物活動をすごく楽しみにするようになり、2月の買い物活動では、仲間と2人でスタッフに「〇〇を2人で買って来てね」と頼まれると、2人で笑顔で話しながら商品を選び、レジに並んで会計をするところまでを協力してやり遂げることができました。店内で隠れて見ていたスタッフは、そのKくんの成長した姿を見てとても嬉しく頼もしく感じることでした。

この実践では、Kくんへの仲間からの声かけや、仲間に関心（Kくん）の思いが受け入れられる経験をすることで、買い物活動への新たな楽しみや面白さを感じ自分から取り組めるようになっていくKくんのすがたを通して、改めて子どもたちにとっての仲間の存在の大きさと、子どもたちの成長にとって欠かせない存在としての仲間の大切さを感じました。

## 5 みんなでつくる誕生日会でのHちゃんクイズ

「ゆめの森」では、月に1回は誕生月の子どものために誕生日会を行なってきました。

この誕生日会では、2回連続して誕生日会の準備、そして当日の誕生日会というように実践を進め、準備段階から自分たちですること、誕生月の子のことをみんなで考えたり思いはかたりしながら誕生日会をつくっていくという取り組みを行ないました。中でも、2月の誕生日会は印象に残る取り組みになりました。

Kちゃんは、小学校に通う1年生で、通級指導教室に通っています。2学期の途中くらいまでは休まずに登園していたのですが、12月くらいから「行きたくない」とお母さんに言うようになり、少しずつ休むようになってきました。お母さんとお話の中で「友達同士のかかわりの中で、Hがうまく伝えられなかったり、悪く受け取ってしまったりすることがあり、『気にしなくていいよ』とか、『先生に言ってみたら』という言葉かけを行なっても『先生には言いたくない』という返事が返ってくるんです。」ということでした。

「ゆめの森」では、全スタッフで、Hちゃんの今の状態について共通理解し、もう一度スタッフとHちゃんの信頼関係をつくることからやり直し、併せてHちゃんの心の中の葛藤を暖かく見守り、Hちゃんが自分から「来たい」と思えるようにしていこうということにしました。

そのような中、2月のHちゃんの誕生日会を迎えました。周りの子たちは「Hちゃん喜んでくれるかな」と言いながら準備の装飾をしたり、窓一面に大きく「Hちゃんおめ

でとう」と書いた広幅用紙を貼り、そこに絵を描いたりしていました。準備を終えて、Kちゃんの誕生日会の当日、主任から「Hちゃんクイズってどうかな？」Hちゃんが自分のことをクイズにして、それにみんなが答える！Hちゃんが思っていることや好きなこと、普段聞けないことも出てくるかもしれないし、みんなにHちゃんのことを分かってもらう機会にもなるし、何よりみんなが自分のことを答えてくれるのってHちゃん嬉しいんじゃないかな？」という提案に、私は頭を叩かれたような衝撃を受け、正直「すごくいいアイデア」と思いました。そして誕生日会でのHちゃんクイズは、大成功。

Hちゃんが、「私の好きな遊びはなんでしょう？①おにごっこ②ドッジボール③けいどろ」や「わたしのお兄ちゃんの名前はなんでしょう？」などのクイズを出すと、みんな「自分が答える」と前のめりでHちゃんの出すHちゃんクイズに答えていました。Hちゃんも恥ずかしそうにしながらとってもいい笑顔で「正解！」と言っていました。

このことから、Hちゃんが「行きたくない」と言った原因も友達との関係でしたが誕生日会でのHちゃんクイズがあり、友達からたくさん声に「友達っていいな」「仲間っていいな」ということを感じる事ができたと考えられます。そのことは、Hちゃんにとってとても嬉しかったと思うし、「自分もまんざらではないな」と感じられることだったとも考えられます。

そのクイズをした後から「今度の誕生日会わたしもクイズしたい」という子どもたちの声がたくさんあがっています。Hちゃんは、休みを入れながらも、少しずつ登園する日が増えてきています。

この実践をとおして改めて、子どもたちと子どもたちをつなぐ実践のアイデアのつくりかたや実践の大切さを感じる事ができました。

## 6 みんなで拍手、椅子取りゲーム

てぶくろグループでは、1年間を通していろいろな遊びをしてきました。その中で、特に子どもたちの成長を感じたのは、3学期に入ってから行った椅子取りゲームの実践でした。

ゲームが始まると、子どもたちは音楽に合わせていろいろな作戦を立てて椅子の近くをいく子、なかなか進まずに座ろうとしている子など、思い思いの方法でゲームに取り組んでいました。そしてゲームは進み、残りの椅子は一つの場面となりました。

その時、これまでとは違う雰囲気を感じました。それは、椅子に座れずに途中で負けてしまった子たちが、残った子たちを応援していたのです。これまでは、ゲームの中で自分の思い通りにならないと、「面白くない」とか「早く終わればいいのに」という声が聞こえていたのですが、その日は、ゲームに負けたYくんが「〇〇ちゃん頑張れ」と応援を始めました。そこで、近くにいたスタッフが「Yくん応援しているね。かっこいいね」と声をかけると、それをきっかけに、周りの子たちも「〇〇くんもがんばれ」「負けるな」などの応援がはじまりました。

その応援の中、最後の椅子はMちゃんが取りました。するとみんなでパチパチと拍手

が始まり、「Mちゃんすごいね」とMちゃんに声をかける子がいました。Mちゃんも恥ずかしそうにしていたのですが、とっても嬉しそうにしていました。

その子どもたちの姿を見て「Mちゃんおめでとう。みんなから拍手をもらってうれしかった？」と聞くと「うん」と頷いて笑顔をみせてくれました。

そして「Mちゃんに拍手をしておめでとうと言えるみんな、応援するみんなはとってもかっこいいし、素敵だね」と言うと、子どもたちも笑顔で答えてくれました。

この実践から、私も子どもたちも学んだことは、仲間を認めることが心地いいということです。この実践に至るまでの期間に、実践の中で「友達同士のつながり」が意識できるように、「〇〇くんと〇〇ちゃんが、〇〇してて楽しそうだったよ」「〇〇くんは〇〇ちゃんが転んだ時に一番最初に“だいじょうぶ”と言ってくれたよ」等のエピソードの紹介を帰りの会でしたり、その場面場面で声かけをしたりしてきました。

また、みんなで一緒に遊ぶことで一体感がもてるような活動の設定や、手だてを行ってきたことで、このような子どもたちの姿が見られたと考えられます。そのことから、日々の実践を大切にすることや言葉かけや実践内容の精選、子どもたちの実態に応じた手だての必要性とそれを積み重ねていくことの大切さを感じることができました。

## 8 実践を振り返って

本稿では、仲間がいるからこそ育っていく実践を取り上げてきました。この実践に見られた子どもたちの姿から改めて、子どもたちの育ちにとって仲間との時間が大切だということを感じることができました。

また、私自身改めて子どもたちの育ちにとって貴重な時間を一緒に過ごす者として、その子どもたちの貴重な時間を有益なものにしていくために、実践の質を高めるために研鑽していくことと、子どもたちが安心して仲間と共に繋がっていくために、子どもたちの気持ちや気持ちの育ちを受け止めていく支援者としての眼や感覚を研ぎ澄ましていくことが必要だと感じました。

今後も、子どもたちが仲間と共に育つ実践の在り方を中心として、気持ちの育ちや気持ちの揺れなどを大切にして実践を深めていきたい。

## ～子どものまなざしの先にあるものは～

### 1、はじめに

子ども家庭支援センターゆめわかばは、平成 23 年 12 月開所し、児童発達支援事業と放課後等デイサービスを行う多機能型事業所である。現在は、児童発達支援事業登録 19 名、放課後等デイサービス登録 28 名（小学生：19 名、中高生：9 名）が通園してきている。昨年の活動の中で、経験した実践を基に、子どものいわゆるわたし目線である“問題行動”が織り成す背景を探る機会があり、実践報告と共に、実践を通じて感じたこととお話したいと思います。

### 2、実践の中から

※高等部 3 年 A さんの場合（知的障害 療育手帳 A-1 てんかん有）

“いわゆる問題行動”＝送迎車から降車しない

◇H26 年～（高校 1 年生）の様子

◎登園は基本週 1 回。土曜活動時は毎回参加。生活リズムを整えるために、週一回の登園も間々ならないことがあったが長期休業中は週 4 回登園している。

◎初めての場所や人への不安があるが、見通しがあれば（見通しカードや写真、見えやすい位置への車の移動等）、活動や送迎時の車の乗降はスムーズに行っていた。てんかん発作を伴っていたので、常時出来るだけ固定のスタッフが付き添っていた。

◇H27 年 3 月～（高校 1 年生～2 年生）の様子

◎てんかんの発作も少なくなり、自分で行きたい方向や興味のあるものを指差し、歓声をあげスタッフに知らせたり、\*はじまりや語尾を言葉にするようになってきている。

・興味のあるもの「絵本」「好きなマークの看板」「歌」

◎学校送迎後、ゆめわかばの玄関に着いてから、40 分程して降りることがある。降りるきっかけは、好きな絵本を渡し、好きなフレーズを一緒に唱えたりしながら段々気持ちも足も向き始めた。本を受け取るタイミングで腕を抱えると、降車する。



**推察** いつもの送迎車と違っていたことが原因かも！

◎外出時に公園に到着するも、車に足をつっぱり抵抗し降車しない。



**推察** 小学生を交えた大勢での活動だった。車は好きだが、公園まで一時間ほどかかり、着いててんかん発作が起きたり等疲れ気味であったためか！

◇平成 27 年 4 月～（高校 2 年生）の様子

◎春活動や親送迎時等、保護者の車から降りるまでに時間がかかるようになった。

また、学校早下校時の日中一時利用事業所の送迎車から降りずに、排泄・食事・着替え等に支障をきたすことも増えてくる。

◎保護者の思いとして、最近反抗期なのか、自分がイヤと思ったら嫌がって拒否するようになり、送迎時の降車も時間がかかるようになってきた。



**推察** 思春期に入り、疲れたり、興味が無かったりして、気持ちの乗らない時  
も出てくるよね！



**スタッフの共有事項** ① お気に入りの車での送迎  
② 好きな絵本を手渡しして、「着替えてから、読もうね」  
の誘いかけをして、気持ちが次の行動に向けられる  
ようにする。

◇夏活動でグループの実践に関わることとなったことをきっかけに、これらの経緯を踏まえて、本人が乗車しない訳ってなんだろう！とじっくり付き合ってみることとなった。

◎スタッフ間で幾つか仮説を立てて支援を行っていく。

① 次の見通しが立たないから？→次の見通しカードの提示をする。玄関前に車を移動し中の様子が見えるようにする。

② 降車時に下肢の動きが固いから？→降りる前にマッサージをしたり、本人の足を降りる方向に向ける。本人が乗り降りしやすく、スタッフが体を導きやすい座席配置にする。

③ 足元が見えづらい、また足が地面に届かない不安があるから？→乗車ドア横に踏み台を置き、すぐに足が届きやすい状態にする。

④ 本人の気持ちが乗らないから？→活動の中身を検討し、本人の好きな活動内容を設定し、誘いかける。



※様々な仮説を立て、根気強く支援を行っていく内に、徐々に降車するまでの時間が短くなっていく。

**そして見えてきたもの**

◎本人が行ったことのある場所や経験した活動が理解できる時には、本人からさっと降りることができるようになったこと。

◎事業所の玄関先に入った途端に表情が変わる瞬間があること。

**それはなぜ？**

※降車して玄関に入るためだけに必死で交錯していたことは、実は“わたしたち目線”だったことに気づいた。そこには、行きたいけれど行けない理由があったか

らだと。臨床心理士や理学療法士の意見も参考にしながら、子どものための“あなた目線”にたつて、もう一度検討し直した。本人の視線の先にあるもの、見えるものって何かな？

#### 再状況把握

- ・本人が降車できずにいると、数人のスタッフが気にかけて、声をかけてきている場面で、部屋から行ったり来たりするスタッフをキョロキョロと見つめている。
- ・送迎が重なり、大勢の子ども達が玄関先で動いていると、凝視し表情が硬い。
- ・送迎車から降りようとしている時に、隣に駐車した車に乗っている仲間が手を振ったりして動いていると、急に動きが止まり、降りることを止めてしまう。(スモークのかかった窓)

#### 再仮説

これらの状況や本人の視線の先、動きを見る中で、本人は元々、得体の知れないもの（被り物やかかしなど）を怖がる傾向にあり、玄関先の外から（明るい）見る玄関は暗く感じ、その先で何が起きているのかわからないことに不安を抱いてしまうこと。また、人が見えたり隠れたり、動きが変化することに不安を感じているのではないかということに行きついた。

ということを基に、降車の際は玄関先ではなく、ゆめわかばの建物は見えるが、玄関は見えない場所（建物前の駐車場）に車を止め、声をかけると自ら降りることができるようになった。

#### ◇H27年9月～の様子

◎学校や家庭での様子を伺ったりする中で、本人の体力もつき、自分で行きたい場所に向かっていくようになった。要求もジェスチャーや指差しなどで伝えるようになり、徐々に発音も明瞭になってきているとのこと。以前に比べると、随分本人との意思疎通も伝わりやすくなってきている。勿論、送迎車等の乗降もスムーズになりつつも、その日の体調や気分により、行きつ戻りつする場合もあるが、比較的送迎時の降車は、どのスタッフが行っても本人の意思で降りるようになっている。

### 3 おわりに

今回の実践報告の中で、私たち目線での“いわゆる問題行動”と表記したが、それは単に私たち側からの“いわゆる問題行動”と捉えることではなく、子どもたちのまなざしの先にあるもの、子どもの表情や目線をたどって思いや要求に気づいていくこと、それこそが“あなた目線”に立つことであり、私たち福祉の分野で働く者の使命のように感じた。前年度末の親子活動の個別面談の中で、言葉の少ない（泣く、笑う、発声は幾

パターンもある) レット症候群の子どもをもつ保護者の方が、「言葉のないわが子のまなざしに気づき、その先を言葉にして、思いを伝えてくれることがどんなに嬉しいか。ありがとうございます。」とおっしゃっていた。とてもありがたい言葉で涙が溢れた。24時間全力でお子さんと向き合っている保護者の思いを踏まえた上で、“何でなのだろう？”と疑問を持ち、仮説を立て、多角方面から考察していくことが大事だと思った。また、実践をしていく上で、共に考え合い、ぶつかり合い、協力し合う職場の仲間がいるからこそ、実践の質が上がり、職員間の連携が生まれ、子ども達の思いや要求に寄り添えられるのではないかと再確認した。

## 毎日通園の大切さ (大ちゃんの1年間を振り返る中で)

～はじめに～

鹿児島子ども療育センターは30余年、子どもと親の願いを真ん中に、親、職員、支援者たちと共に実践・研究・運動をすすめてきました。児童発達支援事業所を経て、2015年より児童発達支援センターへ事業移行し、2歳の子どもから就学前の子どもが毎日通っています。年齢や発達状況に応じて2つのグループに編成し、活動時間は9時30分から15時30分となり、子どもたちにとって毎日の生活を安心して過ごせる環境をようやく保障できるようになりました。

様々な困難を抱えている子どもたち。そんな中でも、とても不安が強く生活リズムが作りきれない、人に安心して向かうことも難しさがあった、大ちゃんがぞうグループで毎日過ごす中で変わっていく姿を報告したいと思います。

### ぞうグループの様子

4歳児3名、3歳児1名、2歳児3名、1歳児1名（計8名のうち、新入園児7名）の子どもたちに対して4名のスタッフで活動していました。発達段階は乳児期の前半から後半の発達段階です。1学期当初は、子どもたちやスタッフは関係が作りきれない、生活の見通しが持てない、遊びが見つからず泣いている子どもが多くいました。一人の子どもが泣いていることで周りの子どもも不安が連鎖し落ち着かなくなる一方でした。しかし、子どもの状況をスタッフ間で話し合い直し、子どもの気持ちに寄り添いながら毎日と一緒に生活や遊びを共にする中で、少しずつ笑顔が見られ、好きな遊びをスタッフと楽しく遊んでいけるようになっていきました。

### 大ちゃんについて

大ちゃんは、1240gという小さな身体で生まれ、自閉症スペクトラムという障害を持っている4歳の男の子です。入園してきた当初は、新しい場所や人への不安が強く、療育センターの部屋に入ることも拒む姿や母親にしがみついてなかなか離れられない姿が見られていました。また、夜の睡眠が安定せず、食事は決まっている物しか食べない姿や分からないことがあると大泣きをする姿もありました。生活面は、自分からやろうとする姿は見られず大人にほとんど援助してもらった状態でした。母親との関係はあるものの、遊びへ向かう時も表情は強張りながら遊ぶ姿が多くありました。母親自身も大ちゃんがいつパニックになるのではないかと「大丈夫よ」と声をかけますが、我が子ながらも恐る恐る関わっている印象がありました。



### “センターに行こう！” ～大人との関係づくり～

大ちゃんにとって、まず、療育センターが“安心できる場所”“楽しい場所”となるように、特定のスタッフとの関係づくりを一番大切に考えていきました。

登園してきた大ちゃんにスタッフが母親と分離を促すと、表情が一気に崩れ激しく泣く大ちゃんです。“泣いても落ち着くまで受け止めるよ、大ちゃん”と思いながら、身体ごと気持ちも一緒に受け止める中で少しずつ泣きやんでいきます。が、とても表情は硬くどこに行こうとしてもスタッフの傍から離れようとしなない姿がありました。スタッフ自身は“大ちゃんの分かること、好きなことは何だろう？好きなことを一緒に楽しみ関係を築きたい”と思い、母親から家庭の状況を聞きました。すると、「絵本が好き。特にだるまさん（シリーズ）」とヒントを教えていただき、スタッフが大ちゃんに楽しそうに読んであげました。好きなことをスタッフがすることで、心地よさを感じて楽しい気分になりスタッフに視線を合わせ、“もう一回読んで”と言わんばかりに絵本を手渡しする姿が見られるようになりました。大ちゃんが楽しいと感じている様子が見られていた時は、視線を合わせて、“たのしいね”などと気持ちを通わせる中でさらに表情も和らぎ声を出して笑う場面も出ていきました。特定のスタッフと毎日の生活を過ごすことで、少しずつ関係も深まり始めて、朝、療育センターに来る時は自分からリュックを背負い、センターに着くと笑顔で母子分離をして遊びに向かうようになりました。

### はじめての運動会（9月）

センターが安心する場所となり、ブランコや箱車など好きな遊びを自分から見つけるとスタッフの手を引いて遊びに誘いかける姿が多く見られるようになりました。機嫌がいい時は声を出す姿も増えました。毎日の生活の繰り返しで、見通しを持ち主体的に動けるようになることで、スタッフから“すごいね”“できたね”などと褒められる場面も増えたことにより、さらに嬉しそうな表情をする姿が増えました。そのうえ、特定のスタッフと限らず、様々なスタッフとの関わりも受け入れられるようになっていきました。

初めての運動会。以前の大ちゃんは日頃と違う環境は苦手さをもっていました。1学期からスタッフと関係を深め、生活の場面でも手応えを感じていたこともあり、大勢の観客がいたり、音楽が流れていたりしても大きな不安を感じて泣くこともなく、身体全体を使って走ることやお友だちと一緒に大きなバス（キャスター車）に乗ったり、個人の運動課題にも取り組んでいくことができていました。

そんな大ちゃんの動じない姿を見て、母親自身は大ちゃんの成長を嬉しそうに感じていたと同時に、母親自身も大ちゃんを見つめる眼差しや関わり方が変わっていました。

### “楽しいね、うんとこしょあそび” ～お話あそびの取り組み（おおきなかぶごっこ）～

3学期のお話あそびでは、「おおきなかぶ」のお話を題材にしながら、実践に取り組んでいきました。スタッフが「おおきなかぶ」の絵本を読んだり、エプロンシアター、手袋人

形でお話をした時に、大ちゃんがかぶを引っ張るつもりで身体を上下に振って楽しむ姿がありました。スタッフが縄をかぶのツルに見立てて「うんとこしょ、どっこいしょ…」と引っ張り合いっこをお友だちと楽しんでいることに気づくと、“何をやってるんだろう”と近づき、近くで声をあげて嬉しそうに見つめる姿がありました。桜島大根での抜く実体験やかぶ抜きごっこをする中で、より気持ちも高まっていきました。

様々な体験をすることで、グループのお友だちにも興味を示すようになっていき、自分からお友だちが楽しく遊んでいる様子をニコニコした表情で見つめたり、“僕も遊びたい”と近づいていく場面も多く出てきました。

～おわりに～

毎日通園の中で、子どもの好きな遊びを通して大人の働きかけで心地よさを感じ、関係を深める中で生活を安心して過ごせるようになったと思います。最初は大好きなスタッフを支えにしていた姿が、大ちゃんはお友だちの中で「ぼくも〇〇したい」「一緒に遊びたい」という気持ちが膨らんできています。今年の春から年長児になった大ちゃんは、入園当初の姿からは予想がつかないほどにお友だちのことが大好きになってお友だちが楽しく遊んでいる輪の中に自分から入ったり、お友だちの真似をしたりする姿が見られるようになりました。困難さを抱えながらも、しっかりと心を豊かに育んできている大ちゃん。これからも子どもたちの内面に秘められた思いや願いをしっかりとくみ取り、その願いを共に実現できるようにしていきたいです。